

福島の復興農学の経験から—“生きる事”の根底にある“耕す営み”

福島大学 食農学類 准教授
石井 秀樹

福島大学8年間の農業研究・支援活動



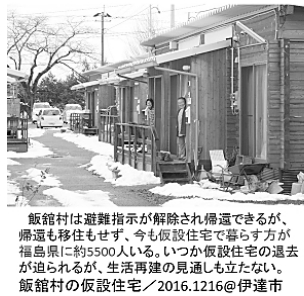
原子力災害の“苦しみ”の特徴 『ダブルバインド(二重拘束)』

- ①再臨界リスク・廃炉など、将来の不透明性
- ②放射線の健康影響に対する評価幅
- ③被害の実態把握の不足・遅れ

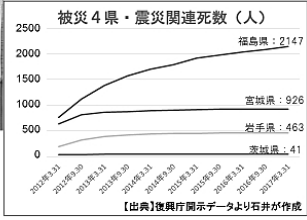
- ・住民同士の分断、地域間の格差
- ・被害が定まらない(⇒被害の過小評価)
- ・生活再建に必要な補償や賠償が受けられない

“どっちつかず”の状況に翻弄され・疲弊してきた
生活再建の取り組みの多くは自力・自助努力

福島原発事故 放射能汚染が、農と生きてきた人々の「暮らし」と 「生業」を奪い、個人の生活再建と地域再生の見通しが立たない災害

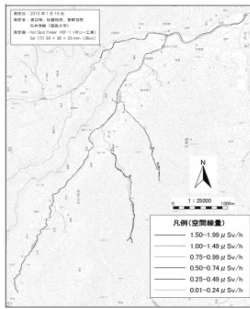


『震災関連死』とは、震災の直接の原因ではなく、その後の被災生活での体調悪化や過労などの間接的原因で死亡する事。福島県だけ、突出して多く、今なお年6%ずつ増加。



復興庁(2013)は、福島の健康悪化や震災関連死の多さの原因は、被災生活の身体的・心理的負荷に加え、原子力災害特有の将来見通しの無さ、地域社会や環境との断絶、社会関係の貧しさにあると指摘

林道・農道・河川管理道路の空間線量

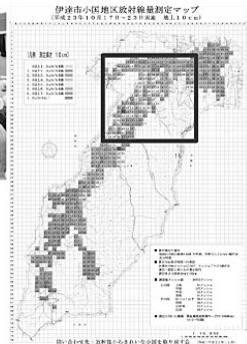


ADR(法定外紛争解決手続き)へ



特定避難避難勧奨地点の住民(月額10万円)との差異/分断

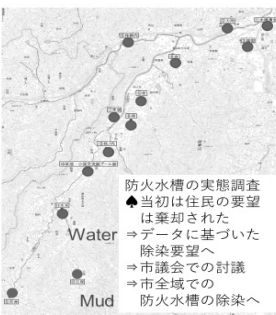
放射能汚染マップの存在が、被害の客観的評価に繋がり、平成23年6月より平成25年3月まで計22か月(合計154万円)が補償されることに



防火水槽の放射能計測

防火水槽	Ca137(Bq/l)	Co136(Bq/l)	合計(Bq/l)
1号	4136±203	8978±205	13114±208
2号	4626±204	1119±205	5745±205
3号	3466±204	1917±205	5383±205
4号	5252±1420	1692±496	6944±1882
5号	6292±204	9218±205	15510±205
6号	8200±1870	7100±370	8900±2450
7号	1112±204	2366±205	3478±205
8号	4502±1303	1800±400	6302±1660
9号	3410±920	1100±200	4510±1120
10号	1902±1004	1100±110	2012±1110
11号	8742±203	1638±205	10380±203
12号	1722±204	817±205	2539±205
13号	1550±4203	810±1130	2360±4970

防火水槽	Ca137(Bq/l)	Co136(Bq/l)	合計(Bq/l)
1号	7448±4434	1481±1471	8929±4849
2号	544±1391	1481±1471	1925±1391
3号	544±1391	1481±1471	1925±1391
4号	544±1391	1481±1471	1925±1391
5号	544±1391	1481±1471	1925±1391
6号	544±1391	1481±1471	1925±1391
7号	544±1391	1481±1471	1925±1391
8号	544±1391	1481±1471	1925±1391
9号	544±1391	1481±1471	1925±1391
10号	544±1391	1481±1471	1925±1391
11号	544±1391	1481±1471	1925±1391
12号	544±1391	1481±1471	1925±1391
13号	544±1391	1481±1471	1925±1391



水稻試験栽培の実施(2012)





水道未整備地区⇒山からの表層水を利用
『飲み水汚染』への不安

⇒住民意識調査により上小国全域で水道整備

【農業復興の捉えなおし】

○政府が主導する農業の復興施策は
植物工場・無人酪農施設・スマート農業など
近代的な高度な技術の導入による災害克服
⇒労力・肥料・エネルギー・設備などの過剰投資を
前提とした、売上げの最大化（国土が狭い日本では
土地生産性を優先した農学を推進・体系化してきた）

○だが被災者が求めるものは「暮らしの再生」
⇒農業者を“工場”に通わせるのか？

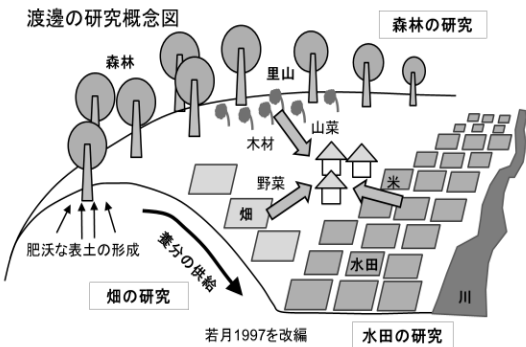
⇒『人間の復興』をさせる農業再生とは？

課題

- ・雑穀類、地域では新たな作目なため、技術的支援が必要。
- ・雑穀類は多様だが、地域に合致した作目の選択ができる。
- ・穀物類の乾燥は、現状は自然乾燥によるが、放射能汚染の交雑汚染対策、処理速度の向上が課題である。
- ・雑穀類は、近年の日本人が食べなくなった食材であるため、調理法・レシピが乏しく、調理法などを文化・歴史から発掘する必要がある。
- ・首都圏に販売できる量が確保できるまで、地産地消が主たる消費であり、地域内を加工しつつ消費を促す組織、道の駅などでの商品提供などから始める。また将来的な販路の確保、マーケティングが課題である。

環境に合わせた栽培品目の然るべき導入

⇒農地保全・活用へ



渡邊芳倫先生ご提供

県酪農協 復興牧場新設へ

3カ所所 乳牛160頭規模

コスト削減や担い手確保へ

南相馬市小高 飯沼村

995ha

概要

- 計画の概要
 - 計画の期間 平成34年9月末まで
 - 解除目標 平成34年春迄
 - 居住人口目標 約80人
- 事業内容
 - 中心地区再生ゾーン
 - 集会所など地域の人々の交流拠点を整備し、コミュニティの維持・継続に繋げる。
 - 農業再生ゾーン
 - 農用地等の利用場を復旧・整備し、震災前の村の中心産業であった農業、畜産の再生を図る。
- 広域図

の整備(=除染)は認められない²¹

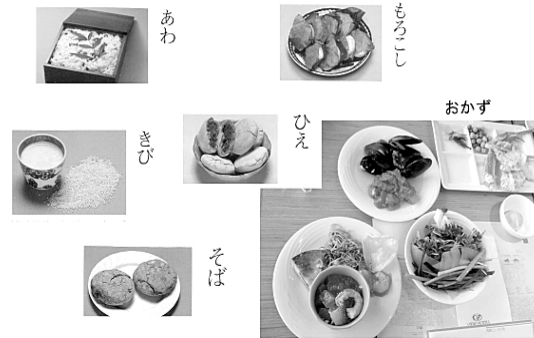
なぜ雑穀栽培が有望なのか？

【期待される効果】

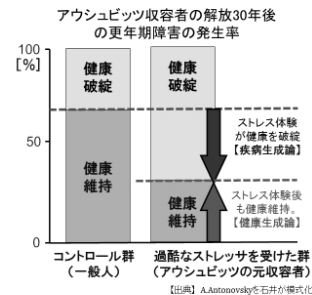
- ①農地の保全、②共同作業（栽培、加工）によるコミュニティ醸成、③健康維持、④副収入増加
- ②雑穀類は、雑穀・麺類・餃子・餅など用途が多い。
- ③米の単価と比べ、雑穀は高額であり有望。通い農業でも栽培できるため、耕作者確保に寄与。

(例) 浜通り産コシヒカリ(H28) 223円/kg、
もち麦1,870円/kg、十五穀米3,750円/kg
※雑穀類は200g~500gの単位で販売が主

主食にもバラエティーを持たせることで食生活を豊かにする



【健康生成論】『過酷なストレスに晒されても、人間にはなお健康を維持し、増進させる力がある』と考える公衆衛生理論。



健康破綻をしなかった人は、特徴的『パーソナリティ』の傾向がみられた。
⇒首尾一貫感覚
SOC: Sense of Coherence
① 把握可能感(Comprehensibility)
② 処理可能感(Manageability)
③ 有意味感(Meaningfulness)
世の中(人生・社会環境)には、一定の秩序があり、見通しが立ち、環境変化に対しては、自分自身が一定の対処ができるとする感覚。
こうした資質が、“ストレス耐性” “生きる力”等として機能する。

「首尾一貫感覚」は、本来個人に備わる(資質)だが、(主體的制御能力)としても捉えられる(園田1999)

☆本稿は大会での石井准教授の発表資料を用いて、編集委員会が編集したものである。